

大岡昇平『出征』の文体

——初期作品の系譜と方法——

佐藤 洋一

はじめに

大岡昇平『出征』は、現在、高校「現代文」（筑摩書房）で教材化されている作品であるが、大岡昇平独特な方法・作品の固有の特質が解明された上で教材化、また、そうした特質（本質）を生かした現代小説の授業実践が行われているとは言いがたい面がある。

『出征』における小説の方法や文体・構造の特質の検討は、単にこの作品の表現原理に即した言語技術と読み方（理解技術）の解明という点にとどまらず、大岡昇平独特の文体の構造と方法を明らかにすることにつながるはずであり、これは混乱の多い戦争文学・現代小説の指導事項の整理や授業の焦点化の観点という点を考える上でも有効であると思われる。

本稿は、小説教材の「言語技術教育論」の立場から大岡昇

平の『出征』を取り上げ、初期作品の系譜の中での位置や大岡昇平の戦争小説の方法と文体等について考察し、大岡昇平の本質と教材の特質を生かした現代小説の授業実践の課題について考えるものである（注一）。

一、大岡昇平の戦争小説の方法と構図

——初期作品の系譜と『出征』——

1、初期作品への着目

これまでは、大岡昇平の初期作品（短編・戦記）についての、文体論・作品論の立場からの本格的な論考は『歩哨の眼について』等二・三の作品を除いてはほとんどみることができない。また、初期作品を中心にして、その後の主要な作品との方法的な関連や文体面からの指摘もみることができない。これは大岡昇平論が、文体や戦争小説の方法論からの考察

がいまだ不十分であるということも原因の一つではあるが、初期作品の意味を小説の方法論という視点から論ずる観点が提出されてこなかったということも関係がある。例えば、『敗走紀行』『出征』等が引用され論じられる場合も、大岡昇平の思想の展開のための補助的な参考資料としての扱いや『野火』『レイテ戦記』等の習作的な作品の扱いであり、作品として独立した価値を認める立場から論じたものはいくつかないからである（注2）。

初期作品の特徴の整理によって、戦争の体験（記録）を大岡がどのように「小説化」していったのか、小説家大岡昇平の「方法」「文体」「構造」をより鮮明に捉えることができると思われる。また、『俘虜記』『野火』等の初期の代表作品はこれらの作品と重なって発表されており、初期作品（短編・戦記）の方法が、中期・後期の作品につながる方法と文体の系譜を位置づけることができるはずである。

2、三つの作品系列・初期作品の系譜

大岡の初期作品はモチーフや文体等の特質からみると、あるまとまりや傾向を指摘することができるといえる。これらの特質はそれぞれ重なり合っているが、特徴的な要素を中心に分けると次の三つの作品の系列（系譜）に整理して考えることができそうである。

一つは「戦友の肖像型」と名づけられる作品の系譜である。

作品の中で戦友のある肖像の記録を中心に、「私」との関係の中で戦友がどのように変化し死んでいったか、その意味を探る形で描かれる。これは戦場（前線）や軍隊における「戦争の真実」「人間の真実」の探究を語るものである。それは同時に、偶然の重なりで死を免れた大岡自身の「もう一つの姿」を探る試みでもある。戦友の肖像を通して、いわば死者となった「もう一人の自分（分身）」へのレクイエム（鎮魂）が中心に描かれている作品群であり、これは何故戦友は死んだのか、何故「私」は死を免れたのかを、軍隊内の人間関係や前線での戦い方・戦争に対する思想・極限状態で発現する人間性の本質・戦争の全体と部分の関係等から描こうとする。この型の作品には、『靴の話』（注3）『食欲について』『暗号手』『襲撃』『女中の子』等がある。

二つ目の系譜は「自己の体験記録型」である。召集から前線への出征、戦場での戦いや敗走、俘虜となる過程を大岡の「戦争の記録」として描くことに中心があり、「私」の心理過程の記録から「他者」「外部世界」を多面的に照射する型の作品群である。体験の記録という表層テクストの深層に、大岡独特の心理描写（事実についての解釈）を通して、戦場での「真実（自己の無意識）」や兵士の精神的腐敗・軍部の愚かさ等の「個人を支配する見えない力」の構造を描いていく。この型の作品には、『出征』『海上にて』『捉まるまで』『歩哨の眼について』（注4）等がある。

三つ目は「外部世界（環境）の記録型」の系譜である。「

戦友の肖像型」が戦友という死者を通して「もう一人の自分（分身）の生と死」を描くことに比重があるとすれば、この「自己の体験記録型」は大岡自身の戦争の体験記録の過程を描くことを通して、他者や外部世界との関係を照射することにより比重がある作品の型である。「外部世界（環境）の記録型」は、この二つの型にも共通して断片的に描かれる「個人を支配する眼に見えない力」の構造を探究する文体の作品群であり、大岡を取り巻く（動かす）「環境」「外部世界」を探究しようとする知的な探究、「世界」の正確な認識を描くことに比重があるものである。この型の作品には、『サンホセの聖母』『敗走紀行』『ミンドロ島誌』等がある。

なお、詳細は省くが「個人を支配する眼に見えない力」の構造は、大きく三つの要素から捉えられていると読むことができる。

- (1) 地理的・自然的環境 …… 自然環境の論理的把握と文体
- (2) 教育的・生き方（倫理観）に関わる環境

危機的状況に発現する「個人の内面（過去・意識と無意識等）」の考察と文体

- (3) 国家的・政治的環境 …… 軍国主義教育（例、御真影教育）や軍隊の規律等の構造

3、大岡昇平の「戦争小説の方法と構図」

大岡の初期作品に頻出する主要なモチーフを整理した「三つの作品の系列（系譜）の型」は、単に初期作品にのみ当てはまるのではなく、大岡の文学活動全体の中で「戦争小説の方法と構図」という点から共通な方法意識や文体の特質を指摘することができる。その要点をまとめたものが次の表である（次頁、参照）。

二、『出征』の作品構成

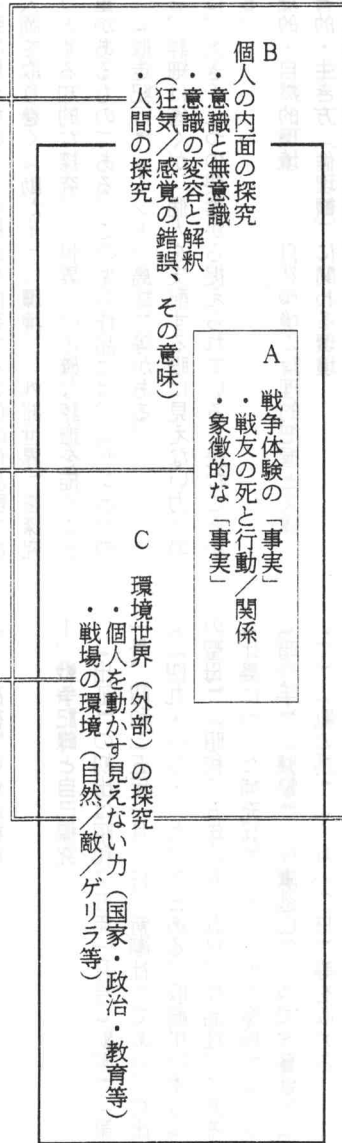
1、戦争記録と自己探究

『出征』の初出は昭和二五年一月号『新潮』（第四七巻第一号、昭和二五年一月一日、新潮社）であり、初出文末には《（四九・一〇・一九）》とある。収録単行本は『サンホセの聖母』（昭和二五年六月一日、作品社）である。本書は『比島についた補充兵』『サンホセの聖母』『ミンドロ島誌』『暗号手』『襲撃』『俘虜逃亡』『西矢隊奮戦』『食慾について』『靴の話』『八月一日』等を収める。

『出征』の文体と方法について具体的に検討する前に、「場面構成」について簡単に確認しておきたい。この作品は出征という「事実」をめぐる一つの戦争記録（エッセイ的作品）として書かれており、内容的には除隊前日に前線への臨時召集が決定され、妻との再会・乗船地への移動と乗船までの過程等、前線に送られるまでの過程が描かれている。時間的に

大岡昇平の戦争小説の方法と構図

A 戦争体験の中の「事実」／象徴化
 B 「国家」に支配される「個人」の深層の真実
 C 「個人」を動かす「目に見えない力」の構造的把握と描写



- (1) 戦場における「真実」の探究
 (2) 現代日本人の「真実」（生きる根拠／意識と無意識）
 (3) 『出征』『襲撃』
- (1) 象徴的な「事実」……
 (2) 戦友（死者）『靴の話』『食欲について』『襲撃』
 (3) 『出征』『襲撃』
- (1) 戦争の「全体性」の構造的な理解（『レイテ戦記』）
 (2) 個人の行動／感覚の「深層」にあるものの探究（教育／政治／国家／その他）
 (3) 『サンホセの聖母』『敗走紀行』『出征』『襲撃』他

は、除隊取り消しの昭和一九年六月一〇日から日本を離れる六月三二日までの約二〇間が描かれている。

本稿では、体験（記録）を再構成する大岡の戦争小説の法意識と作品の構造をより鮮明にするという観点から、次に示すような七場面構成として考えてゆくこととしたい。

第一場面 状況設定（昭和一九年六月一〇日）

- 1、作品の背景（時代・場所・状況）
 - 2、冒頭のエピソード（除隊予定前日に前線行きを知る場面、陸軍歩兵二等兵大岡・補充兵）
 - 3、前線行きの訓示（補充兵の出征、百名中約半数）
- 除隊する者と前線行きの者の対比

第二場面 展開①―死の覚悟・家族―

- 1、六月一日、臨時召集となる・劣悪な軍備支給
- 2、「私」の家族紹介（妻と二人の子供）
- 3、出征の決意と遺書（死を覚悟）
- 4、学校出の兵士の「道徳的腐敗」

第三場面 展開②―面会日・友人との別れ―

- 1、六月二三日、東部第三部隊に転属
- 2、六月一六日、面会の日（二人の友人）
- 3、友人との面会と別れ（妻子とは会えない）

第四場面 展開③―妻子との再会と別れ―

- 1、六月一七日、炎天下での部隊の行軍
- 2、妻子との偶然の再会（品川駅頭）

出 征 の 実 事

出 征 の 経 緯

3、妻子との別れ・千人針を受け取る

第五場面 展開④―死の予感―

- 1、輸送列車で下関へ向かう
- 2、下関・門司での一週間の滞在（二〇日―二七日）
（宿泊先の中年の女主人との関係）
- 3、死の自覚と根拠・死の予感
（「年老いた佐官」と軍首脳部の愚劣）

第六場面 発展―「私」を支配する見えない構造―

- 1、六月二七日、輸送船に乗船（「私」の戦争観）
- 2、「死の恐怖」からの「空想」と自己検討
（個人の深層―死との直面による真実の発見―）
- 3、「千人針」の放棄と「歪んだ笑い」「涙」
（個人の深層―眼に見えない国家の支配力―）

第七場面 まとめ―出征と「私」の感情―

- 1、六月三日、船団の出発
- 2、出征の「事実」と「感情」
（個人の感情を超える「事実」の大きさ）

2、作品の表層と深層

この小説の基本的構図は、「私」の出征の記録（表層）の深層に、個人の真実（無意識）と個人を支配し動かす「目に見えない支配力」の構造を描き出すということにある。

第一場面は、昭和一九年六月一〇日の明け方、陸軍歩兵二

過

私 の 深 層

出 発

等兵大岡が不獲番勤務の帰りに、突然衛兵下番の古兵に「え、お前達前線行きじゃねえのか」と南方の前線行きを知らされる場面からはじまる。「私」達は三ヶ月の教育召集を終え、既に除隊用の私物も受け取り、今日まさに除隊する予定になっていた状況である。ここでは入営後の部隊の様子と前線行きの訓示が行われた朝の様子を通して、戦況の悪化に伴い大岡達のような補充兵も前線へ送られる背景が語られる。時は敗戦の一四ヵ月前のことである。

第二―五場面までは、南方へ向かう輸送船乗り場である下関（門司）までの移動が幾つかのエピソードを通して描かれる。炎天下の品川駅までの行軍・出征の決意と遺書・学校出の兵士の「道徳的腐敗」・大岡の妻子との偶然的再会・妻から千人針を貰うこと（別れ）等である。

第六場面はいよいよ日本を離れる時になり、死の恐怖を今までのように論理的に（意識のレベル）でなく感覚的に（無意識のレベルで）実感するに至った時の心理描写が独特の文体で描かれている。「私」とっては、入営当初から死は意識のレベルでは覚悟してきたことであり、既に「甘受すること」にきめていた死ではあったが、「無意味な死が目前に迫った時、私は初めて自分が殺されるということを実感」する。ここでの「輸送船上での死の恐怖から発した空想」と死を前にしての「果して自分は何者であったか」という「自分の生涯の反省」、その結果としての海面にみる幻覚（《幻像》）

と〈千人針〉の放棄という行為の場面こそがこの作品の核心に当たる部分である。意識のレベルを超えて無意識の深層心理が、幻覚・理由の分からない行為や意識を超えた〈歪んだ笑い〉や〈涙〉として描かれる（注5）。

第七場面・作品末尾の部分は、前線に送られる兵士を乗せた輸送船が九隻並んで「夕照の中を走る光景」の「堂々として美しい」場面で終わる。「勇壮ならざる出征者」を乗せた「ぼろ船」が玄海灘を過ぎる時、「私」は次のように語る（傍線は佐藤、以下同じ。注6）。

あの島が祖国の見納めになるだろうと、と私は思った。島を通過すれば船は恐らく外洋へ出て、私は二度と日本を見ないであろう。（略）／私に何か感慨があったかどうか、わからなかった。しかしその時の私の中の感情は、私が出征によって、祖国の外へ、死へ向かって積み出されて行くという事実を被うに足りない、と私は感じた。この場面は、「私」という個人の「感情」を超える出征という「事実」の巨大さを強調しながら、単に個人を支配する見えない力の恐ろしさや愚劣さ、それらへの反抗という意味を語っているだけではないと思われる。

死を実感しての自己反省の考察を通して「国家への反抗の精神も、理想も持たない自己の発見」（第六場面）という文脈を踏まえれば、こうした表現は国家への批評意識の現れ（反抗）だけではなく、同時に自己の脆弱な思想と行動に対す

る厳しい批評として反転していることがわかる。

三、「私」の認識と対比的人物の位置

1、「私」の認識の変化―意識の表層から深層へ―

作品を構成しているのは「私（大岡昇平）」の語り（表現の視点）であり、「私」の認識の変化の過程がこの作品の文体的中軸になっている。同時に「他者」「外部世界」を暗示する対比的な人物群もまた、独特の役割をもっていると思われることができる。

「私」は召集される前までは、出征による死については予期し覚悟もしており、自分とは関わりのない所で決定、遂行されているこの戦争の愚劣な意味についても知的な認識をもっていたことが語られている。

(1) 一八年の秋私が前の会社を辞めた時、私は日本が負けつつあること、近い将来に私のような三十代の補充兵も前線で死なねばならぬ時が来るのを覚悟した（第二場面）

(2) 私はこの負け戦が貧しい日本の資本家の自暴自棄と、旧弊な軍人の虚栄心から始められたと思っていた。（略）

当時私の自棄っぱちな気持ちでは、敗れた祖国はどうせ生き永らえるに値しないのであった（第六場面）

そして、権力の恐怖とその意味を自覚している「私」にとって、この戦争における権力や国家の支配に対する「反抗の

欲望」の感覚は無かったことも語られる（第六場面↓四）。

しかし、この作品の末尾の場面では、出征の「事実」によって「自分が殺されるということを実感」し「今殺される寸前」の「私」は、次のように述懐する。「私に何か感慨があったかどうか、わからなかった。しかしその時の私の中の感情は、私が出征によって、祖国の外へ、死へ向かって積み出されて行くという事実を被うに足りない」。

ここに見られる「私」の認識の変化をA出征以前・B出征の「事実」と自己探究・C出征、と大きく三段階に分けて整理すると次のようになるだろう。

A

出征以前……………明確な認識と覚悟「意識レベル」

〔第二、六場面〕

- 1、死・権力（国家）・戦争・自己についての明確な認識
- 2、戦争原因は「資本家の自暴自棄と旧弊な軍人の虚栄心」
- 3、権力への反抗の意思も無く祖国は生きるに値しない

B

出征の「事実」と自己探究……………「意識から無意識へ」

〔一、六場面〕

- 1、召集（三カ月の教育召集）……………出征の「事実」
- 2、南方の前線行き（臨時召集）……………「私」の意識のズレ
- 3、死の予感と欲望の消失……………感覚と認識

軍部首脳部の「善良な低能」 (意識↓無意識)

4、「死の恐怖」からの《空想》

過去の真実の《幾多の錯誤》

5、海上の《幻像(幻覚)》と

《千人針》の放棄・

《歪んだ笑い》《涙》

「私」の意識の深層
の心理描写

（「個人」を超える
支配力の構造）

C 出征（祖国を離れ南方へ）……より深い認識（意識化）

（第七場面）

1、出征という「事実」（Bの1→2のエピソード）

2、「事実」（国家／権力等の見えない支配力）に支配される「個人の感情」

2、認識の変化と対比的人物群

「私」の認識の変化は、結局「私」の中の感情は、私が出征によって、祖国の外へ、死へ向かって積み出されて行くという事実を被うに足りない」という点に至るだが、この認識を支えているのは「B 出征の「事実」と自己探究」の段階における認識の変化過程（意識と無意識）の描写の部分である。この部分は明確な認識が、《殺される》という実感と死の恐怖によって大岡のこれまでの意識が次第にズレて混乱し、意識の深層（無意識）に個人を支配する見えない力を発見する過程であり、同時に自己の真実を探究する論理的な文体と

なっている。以下、「私」の認識の変化との関係から、B段階の主要な対比的人物の役割と位置について取り上げることにする。

(1) 下士官・若い兵隊―死の予感・欲望の意味―

次の場面は門司で出港を待つ六月二〇日（二十七日の間に、「私」の中で「死の予感」が切実なものとなり、性的な欲望が起こる余裕を奪っている状況を語っている部分である。

通りから横町を入ると遊廓がある。昼間でも演習の帰りにのぞくと、肥った娼婦が魚の腹のような腿を出して笑っていたりする。下士官や若い兵隊の一部は、深夜ひそかに彼女達を訪れたようであるが、我々中年の補充兵は一人も出掛けなかった。一体に我々はこの後半年の駐屯中も、格別そういう欲望の刺激を感じた形跡はない。他人はよく知らないが、私一個としては明瞭であった。

いつもある死の予感がそういう欲望の生じる余裕を与えないのである。（略）今こうして出港地で無為に過ごすうちに、だんだんはつきりした輪郭を「死の予感」佐藤注）取るようになった。米潜水艦は港外で我々を待っているかも知れないのである（第六場面末尾）。

古兵や下士官、若い兵隊達の人物像は、当時の軍隊内における「戦争」や、戦争末期の日本軍の愚かさ等を語るエピソードとして語られることが多い。同時にこれ等の人物との関係によって、「私」の戦争観や生き方の個性が強調されると

いう意味もある。ここでは下士官や若い兵隊達の「常識的な感覚・欲望」との対比で、「私」を捉える死の予感の確実さ、恐怖を強調していることが分かる。

(2) 年老いた佐官 ―日本の軍隊首脳部の愚かさ―

「年老いた佐官」が登場するのは第六場面末、死の予感が「はっきりした輪郭を取るようになつた時期、門司を出発する前の軍装検査の時である。

我々が受けた退戦訓練は滑稽なものであった。傾く船の反対側から降りるとか、潮流の方向を見きわめて下の方から飛び込めとか、実際に当たつてとても実行できそうもないことばかりであつた。出発前の軍装検査の時、廻つて来た年老いた佐官の質問に答えて、我々の一人が教えられたところを暗誦すると、老人は溜息して「こういう心得のある兵隊ばかりであつたら、我軍の損害も僅少で済むんだが」といったが、近代国家の軍の首脳部にこういう善良な低能が存在しうるのは驚異である。

前線ではおよそ役に立たないような滑稽な訓練は、日本軍の戦いについての呆れる程の認識の低さを示すものだが、それは日本軍の首脳部（軍人）の愚かさを語るものである。「年老いた佐官」はこうした日本の軍隊の認識と構造を鮮明に示す人物（エピソード）として語られている。

(3) 妻子 ―「私」と妻の意識のズレ―

出征時に家族や妻子との別れが重要な意味を持つことは当

然だが、ここで注目したいのは妻との別離にあたつて感じた「私」の意識や認識と、妻の意識のズレが繰り返して語られていることである。大岡は、こうした「自己の意識と他者の意識のズレ」「私の錯誤や思い込み（空想）」等を、他の作品でも意識的な表現方法として用いている。これは「事実」や「全体」を構造的、論理的に捉えようとする正確さへの執着（真実探究の文体）である。

この作品では、死を実感した時の「私」の意識と妻の視線とのズレを対比的に描くことで、「私」の不安定な心理や「事実」「真実」の捉えがたさを強調していると読むことができる。妻との場面では三回繰り返されている。

六月一四日、二時過ぎ品川駅正面の坂の上で完全武装での炎天下二里の行軍の後、休んでいると妻が面会に来ている。

「大岡、面会だぞ」と道の向側から呼ぶ声がした。見るとそこには夢のように妻が立って、じっとこっちを見詰めていた。／妻は白い単衣に下の男の子を紐で背負い、上の女の子の手を引いて歩道に立っていた。髪と衣服の汚れと乱れは十間以上離れていてもよく見てとれた。／私はこの妻の姿に私が死んだ後の彼女の姿を見たと思つた。同時に妻の方では変わり果てた私の姿に、「死」を見たといっている。

再会での妻は「私」にとつて、「私が死んだ後の姿」「夢のように」立ちじっと見つめる姿としてとらえられ、妻にと

つては重裝備での行軍で疲れ切った夫の「変わり果てた」姿に「死」を見る、という視覚によるズレの場面である。

妻子とは「集まれ」の号令で、もぎ離されるように別れることになる。「私」は妻に最後の言葉を掛ける。

「きつと帰って来るから、心配しないでいいよ」／と私はその時いったそうである。私はそれを忘れていたが、恐らくそれは咄嗟の場合に狩り出された私の愛情の最後の表現であった。しかし妻はただ自分を慰めるためと取った。彼女の見た私の姿で、私が生きて帰れようとはとても思えなかった、と彼女はいつている。

「私」にとって記憶から欠落した最後の愛情の表現は、妻にとつては慰めと捉えられる。ここでは、言葉（会話）の意識のズレが語られている。

妻と会ったことはしかし私の心に、かすかに明るいものを伝えてきた。六対四の四の方に入ったことが、或いは私の運のどん底であつて、これからは昇り運になるのではないか、もしこれで潜水艦の魚雷を免れてマニラに着くことが出来れば、その運の連続として、生きて還れるか知れない、などと埒もないことを考えた。（略）／

妻は反対にこうして思いがけず私に会えたからこそ、私は帰ってこない、と信じたそうである。そして私の留守をその信条に従つて暮らし、実際彼女は殆ど正しかつた。

妻との偶然的再会は「私」に生へのかすかな希望を感じさせるが、妻にとつては思いがけず会えたからこそ夫は「帰ってこない」と逆に信じる。再会の意味を夫と妻はほとんど正反對の受けとめ方をする。

戦争の「全体像」が見えないまま、最も理解しあつているはずの夫婦の間でもこうした意識のズレが起こっている。人間の真実、事件の「全体像」の捉えがたきは、他者である中年の女主人との関係でも強調されている。

(4)喫茶店の女主人―他者の視線と自己認識―

下関で「私」と僚友一名に割り当てられた民家（宿泊のため）は、町の繁華街の裏にある喫茶店であつた。中年の女主人には、左手小指の第二関節から先の無い年下の夫と、貰ひ子という女の子がいる。「私」は親切なこの女主人を通して、子供に甘味品を送る。

私は彼女に託して遂に子供に届ける望みを達した（届けたものは、目的地までの二十日分の甘味品として支給されたキャラメル、羊羹、飴玉等（佐藤注））。海苔の空缶を借りて、ほぼ私の持つ半分を入れることが出来た。女主人はなかなか文学的表現を知っていた。小包に添えて妻に送った手紙には「あの呑気な朗らかな方に大きく隠された愛情を奥床しく思いました」と彼女は書いていた。私は自分では始終屈託があると思つてゐるのに、他人がいつも私を呑気と表するのが不思議でならない。

喫茶店の女主人の姿は、戦争末期の「日常」を描きながら出征（戦争）という巨大な「事実」に翻弄される「私」の意識のズレや不安的な心理をユーモラスに語っている。

(5) 『学校出の補充兵』―道徳的腐敗・日本軍隊の思想―

日本の軍隊首脳部の愚かさは「年老いた佐官」という典型的な例を通して語られていた。ここでは人間の本質を捉えずに安易な認識のもとに行われた「日本の軍隊の教育や思想（軍隊のシステム）」や職業軍人の愚かさ、そして学校出の兵士の「道徳的腐敗」に焦点が当てられている。

私達の班は温和な近衛隊長長の奇妙な術学趣味によって、専門学校以上を出た者ばかり集めていた。そうして農民や労働者とは別な方針で教育すれば、時間の経済である上、優秀な兵隊が出来上がるだろう、というのが彼の夢であったが、現実はこの反した。農民出の班長や助教が、我々の差別待遇に示した嫉視と意地悪は別としても、何よりも隊長はこれ等学校出の道徳的腐敗を勸定に入っていたのである。（略）

しかしこれら腐敗した学校出の補充兵の態度には、前線行きときまると、明瞭な変化が現われた。彼等の学生の狡智は一瞬にして影を潜め、一種の優しいたわりの感情が我々を結んだようである。いやな仕事はなるべく他人に譲るというそれまでの狡智は、大抵は自ら進んでやるという相互補助の精神と替えられた。（しかし、こ

れも仲間の一部が幸運に赴き、自分等だけが不幸の中に残された、という事実から出た一種の共通の感情にすぎなかったらしい。以来前線へ送られる途中、及び駐屯中の諸々の軍隊日常の必要は、我々を再び元のエゴイストとし、それは米軍が上陸して敗兵と化しても去らなかつた。）

学校出の兵士の「道徳的腐敗」、つまりインテリの感傷的で無思想のエゴイズムについては、『襲撃』や『暗号手』等他の作品で主要なモチーフとして展開されることになるし、ここでの兵士の精神的墮落についても『俘虜記』等で詳細に描かれることになる要素である。

四、〈反抗〉と〈理想〉のない屈辱

―死による自己探究―

三では「私」の戦争や死に対する論理的な認識や決意が、南方前線への出征という「事実」によって次第に「死への恐怖や予感」が現実のものとして実感され、変化してきた過程について述べた。

しかし「何かまわりからどうともならないものにしめつけられるような感覚」（死の予感）はまだそれほど切迫したものではなく、「私はこの時、やがて前方から来るべき米軍に殺されるとは少しも感じなかった」のである（第五場面）。

出征という「事実」に伴う、こうした「私」の死への予感が意識の深層にまで下降し、意識と無意識の交錯の過程の混濁を描くことで「人間の真実（深層心理）」を描こうとしているのが、六月二十七日輸送船第二玉津丸に乗船してからの場面である。

輸送船上で無為に眺め暮らしているうちに、「私」は「自分の惨めさ」が肝にこたえ、既に目前に迫った死の「無意味さ」を実感する。「私」の反省は戦争を起こす側（殺す者）とそれに対する「私」（殺される者）の関係の中で「私の反抗の意思」の存在とそのありかたを通して検討される。それは次のような段階を経て行われる。

私はこの負け戦が貧しい日本の資本家の自暴自棄と、旧弊な軍人の虚栄心から始められたことと思っていた。A そのため私が犠牲になるのは馬鹿げていたが、非力な私が彼らを止めるため何もすることが出来なかった。以上止むを得ない。当時私の自棄っぱちの気持ちでは、敗れた祖国はどうせ生き永らえるに値しないのであった。

しかし今こうしてその無意味な死が目前に迫った時、B 私は初めて自分が殺されるということを実感した。その場として同じ死ぬならば果して私は自分の命を自分を殺す面者、つまり資本家と軍人に反抗することに賭けること

「はできなかったか、と反省した。」

出征前の「私」の戦争観と、国家・死についての認識は（A場面）、〈殺されるという実感〉（B場面）を通してへ自分を殺す者（資本家・軍人）への反抗の意思の検討に向かう。そして「私は自分の中に少しも反抗の欲望を感じなかった」「自己」の姿を発見するのである（C場面）。

平凡な傭給生活者は所謂反戦運動と縁はなかったし、C 昭和初期の転向時代に大人となった私は、権力がいか場 に強いものであるか、どんなに強い思想家でも動揺さ面 せずにはおかぬものであるかを知っていた。そして「私は自分の中に少しも反抗の欲望を感じなかった。」

しかし、反抗の意思は最初に召集を受けた時、脳裏をかすめたことを想起する。そしてこの時の「反抗」の意思が不可能に終わった理由、つまり「召集されても前線に送られるとは限らない、送られても死ぬとは限らない」という曖昧な認識に出会う（D場面）。それは国家や権力の恐怖の真実を自覚する必然性が欠けていたためであった。

反抗はしかし半年前、神戸で最初に召集を覚悟した時、私の脳裡をかすめた。かすめたのはたしかにそれが一個の可能性にすぎなかったからであるが、その時それが正に可能性に終わった理由を検討して、私は次のことを発見した。即ちその時軍に抗うことは確実に場 殺されるのに反し、じっとしていれば、必ずしも召集

されるところは限らない、召集されても前線に送られるとは限らない、送られても死ぬとは限らないということである。／＼確実な死に向かって歩み寄る必然性は當時私の生活のどこにもなかった。しかし今殺される寸前の私にはそれがある。

すべてこういう考えは、その時輸送船上の死の恐怖から発した空想であつた。空想はたわいないものであるが、その論理に誤りがあるとは思われない。

しかし同時に今はもう遅い、とも感じた。民間で権力に抗うのが民衆に欺されている以上無意味であるのにもまして、軍隊内で軍に反抗すまのは、軍が思うままに反抗者を処理することが出来る以上、無意味であつた。私はやはり「死ぬとは限らない」という一縷の望みにすべてを賭けるほかはないのを納得しなければならなかつた。

私はいかにも自分が愚劣であることを痛感したが、これが理想を持たない私の生活の必然の結果であつた以上、止むを得なかつた。現在とても私が理想を持っていないのは同じである。ただこの愚劣は一個の生涯の中で繰り返され得ない。それは屈辱であると私は思う。

「平凡な俸給生活者」である自分が「死」を「今殺される

寸前の私」と言う形で実感し、国家と一個の人間（個人）との関係から自己の真実を検討する。すると、そこには国家／＼権力／＼軍隊等への「反抗の欲望」も持たず、反抗のバネとなる「理想」も持たない愚劣な自己を発見する（F場面）。こうした自己の愚劣さは確実に歩み寄る死（今殺される寸前の私）には修正不可能なものであり、一個の人間としての意思や尊厳をまるごと崩壊させるこの戦争の構造に、「私」は「屈辱」を感じる。

こうした「屈辱」の中で「私」の自己の真実を正確に探ろうとする意思は、自分は「果して何者であつたか」の反省に向かう。

五、〈千人針〉の放棄と〈歪んだ笑い〉〈涙〉

―無意識による真実の発見―

心理分析の「意識レベル」が「無意識のレベル」に深化するのが六場面後半、海上に白昼夢のような幻覚（幻像）を見る場面とその映像の上に品川で妻から貰つた〈千人針〉を棄てる二つの場面である。この部分は「今殺される寸前の私」として実感による自己探究の文体が、「意識」から「無意識（感覚・幻覚等）」の段階に深化し、論理的な認識を超えた深層（真実）が描き出されている優れた描写の場面として読むことができる。

「私」は自分は「果して何者であつたか」という「全生涯の遍歴」の過程で過去の真実と思つていたものに「幾多の錯誤を發見」するが、「最も幸福な瞬間が何の思い出も残さない」というスタンダールの言葉を想起し、自分と妻との愛情の真実を意識的に納得させようとする。「妻と私の間にもこうした記憶に残らない時間があつたかもしれない。もし妻と品川で分かれる時、私に言葉がなかったのが、そういう原理によるものならば倖せである」と。

「私」のいる場所は甲板が次第に反つて高くなつてゐる舳先であり、「欄に上ると、眼くるめく下に青々と水がたたえているさま」が眺められるところである。

私は水を見詰めた。そこには私がこれまでただの戯れの恋と思つていた女の映像が浮かんた。その時彼女が現れたのは、多分私が彼女と海が泳いだことがあつたからであらう。女は男に媚びることを知つていた。派手な海水着を着た彼女は浪に身を翻して笑つた。

私の観照は次第に白昼夢の色を帯びて来た。水の上を上の女の子が匍つて来た。子供は轎車に乗つた動物の玩具のように、両手を前に突いたままの姿勢で進んで来た。船尾から眼の下を通り、私の眼の移るに従つて舳先へ消えた。

子供はもう匍う年頃ではなかつたから、これは私の観照の舞台が水という平面であつた

結果であらう。

子供は私の欲するままに再び船尾の水面に現われ、懸命に前を向いて進んで来た。その幻像の上に、私が何故品川で妻が与えた千人針を投げる氣になつたか不明である。

ここでは、何故妻の幻像ではなく「戯れの恋と思つていた女」を、そして娘の幻像を想起したのかは解釈もされず語られていない。なお、大岡昇平の無意識と「水」のイメージの親和性については、他の作品等にも頻繁に見られるものである（『黒髪』『武蔵野夫人』等）。

次は千人針を海に棄てるという行為と、それについての解釈を語っている部分である。

いずれこれは私の好まぬ迷信的特物であつたが、何か記憶に残らない発作にあつたのであらう。強いていへば私は前線で一人死ぬのに、私の愛する者の影響を蒙りたくなかつたといえようか。国家がその手先に男子のみを必要とする以上、これは純然たる私一個の問題であつて、家族のあずかり知るところではない。

私はそれを雑糞から取り出すと、何となく拵けて海に抛つた。夕方の海はまだ明るかつた。布はあるとも見えない風にあおられ、船腹に沿つて船尾の方へ飛んで行つた。

この後、千人針を棄てたことが他の兵士の眼にとまり、兵士の「怪訝と共に非難」を避けるために、足早に船先の反対側の甲板に出て隠れる場面である。「私は自分の純然たる行為が、こんなに大勢に注意を惹いてしまったのに少し慌てた」が「私の顔は多分笑っていたらと思う」。私は欄を降り素早くその場を離れ、下士官の気まぐれから「『銃後の真心の結晶を何故棄てた』など平手打ちを喰ってはつまらない」と思い、反対側の甲板へ出ると空いていた便所へ入る。以下の引用は次の部分である。

無 便所は粗末な木で造られ、海へ突き出ていた。臭気意 の中で蹲みながら、私の口は依然笑いに歪んでいたが、識 「突然眼が熱くなった。」

この「歪んだ笑い」と「涙」という無意識の感情の表出は何であったのか、「千人針」の放棄という行為の意味との関連から考えてみたい。「千人針」は「私」が下士官の怒りを想起したように「銃後の真心の結晶」、つまり銃後の女性（妻）の武運長久の祈りの表現であり、戦争遂行の日本国家の側に立った女たちの祈りの表現でもある。

それでは、これを放棄するという行為にはどのような意味があるのか。第一に、戦争を引き起こしている国家への「私の反抗の意識による行為」という意味がある。第二に、家族を国家の愚かな行為に巻き込みたくないという妻への逆説的な「私」の愛情の表現、第三に、戦争参加を「純然たる個人

的行為」と見なす「私」の自負の現れとみることができる。

しかし、これらの反抗や意識、感情は悉く国家の支配に囚われているという事実直ぐに気づかざるを得ない。つまり、反抗の意思も抵抗も無く前線への輸送船で送られている「事実」を考えると、これらは結局無力な抵抗に過ぎない。それは同時に妻の夫への愛情の否定につながることもある。結局は戦争参加を「純然たる個人的行為」と見なし、いても、無力な抵抗に過ぎないことを自覚させられることになる。

「歪んだ笑い」と「涙」は、ある意味ではこうした「国家」の前での「個人」の解体（崩壊）を否応無く突きつけられた悲しみ、無力感、怒り、自嘲等の複雑な心理の感覚的表現と読むことができるのである。

なお、大岡の作品におけるこうした「涙」、いわゆる感情性については、小説の方法論レベルから取り上げられることはほとんど無く、取り上げられるにしても作品の中での（人物の）否定的な要素として読まれてきている（注7）。

人物のこのような、いわば感傷性の描写は、作者大岡の感受性との関係から考えることは必要である。だが、小説の構造という点からみると、涙や感傷の場面はほとんど幻覚や錯誤等の意識の混乱（意識から無意識へ）を表す部分とともに語られていることが多い。作品全体の構造からは、感傷性（感覚）や意識の混乱（錯誤や幻覚等）の表現は、意識の深層における真実を描き出すための、一つの小説の方法（レトリ

ック)として捉える必要があると思われる。

六、出征における「人間」の発見と批評

『出征』は大岡自身の出征の体験記録を語りながら、妻との別れ・大岡自身の意識と他者の意識のズレ・学校出の兵士の精神的な墮落・死を実感した時の「空想」「自己反省」、海上の女の『幻像』等、事実やエピソードについての独特の「論理的な解釈(心理描写)」が描かれるという二重構造の文体をもっている。この中のいくつかのモチーフは、後に『野火』『俘虜記』『武蔵野夫人』等の主要な作品で方法的に用いられ具体的に展開されることになるものである。

『出征』の作品としての特色をまとめていえば、自己の戦争体験記録(出征)という表層テクストの奥に、二つの意味を持つ意識と無意識の深層を描いたことにある。一つは死を実感しての自己探究(個人の内部の探究/反抗や理想、愛情等の無意識)であり、もう一つは個人の深層に存在する「眼に見えない支配する力」(個人の内部の探究/国家・軍国主義思想・制度等の無意識)を「個人の深層と国家の関係」として浮かび上がらせたことである。

そして、こうした大岡の方法意識と優れた思考(認識)が文体による発見と批評として描かれているのが〈千人針〉の放棄と〈歪んだ笑い〉〈涙〉の場面である。この場面は五で

述べたように、単に「国家に対する反抗」(注8)としてだけではない多面的な意味を読みとれる点が重要である。つまり、意識と無意識の交錯する心理描写(論理的で分析的文体)を通して、「純然たる個人」として「国家」に対峙する大岡の生き方を語るとともに、「国家」の中の個人としての無力さ、愚劣さという厳しい自己への批評的認識を語っているのである。

この二点は結果として「個人」を超える「国家(眼に見えない支配する力・権力)」の巨大さと愚劣さを拡大するが(批評性)、より重要なのは「私」の論理的な追求の意識過程と探究の文体の構造にこそある、ということができる。

この作品も他の初期作品同様、しばしば大岡自身の「戦争の体験記録(事実)」―「私小説」としてのみ読まれがちだが、「主人公」作者＝大岡昇平という図式が成り立つ点で私小説的構造をもっているが、作者自身への厳密な自己批判を通しての知的再構成である点で、旧来の私小説の枠を破っている(注9)作品であり、そして問題は、どのような「知的再構成」によって「旧来の私小説の枠を破っている」か、あるいは戦争体験の記録の方法を生かした小説の魅力や特質はどこにあるのか、といった文体の構造・小説の方法の検討こそが重要なのである。

おわりに

この作品は「出征」における「私」の記録を通して、国家権力・戦争・妻（家族）・死の観念等大岡の意識と無意識の「深層心理」を描いた作品であり、死と国家（権力）の恐怖を実感した現代人の真実を描いた作品である。現代の組織的な管理や国家の権力の支配の中であって、常に「一個人の人間」でありつづけようとする冷静で強靱な精神は、出征や妻子との再会等の「事実」と幻覚や感覚等の意識（無意識）等の思考を探究する論理的な文体として描かれている。

『出征』では特に、確実な死を実感したときの「私」の空想（幻覚）と自己反省、千人針放棄の第六場面は、論理的に自己（個人）と世界（国家権力や他者・制度等）を捉えようとする独特の文体で描かれており、大岡特有の小説の方法をみることができる。

『出征』は初期作品の系譜の中であらえたと『海上にて』『歩哨の眼について』等とともに「自己の体験記録型」の典型的な要素をもつ作品だが、他の初期作品同様に、部分的に描かれながら、まだこの段階では主要なモチーフとして展開されていない要素も混在する（学校出の兵士の「道徳的腐敗」や軍首脳部の愚劣さ、死の感覚による「外界」の変容等）。

そのため、一見すると作品としての密度やまとまりに欠ける部分もみられないではないが、大岡の戦争小説の方法と構図（戦争体験の「事実」と解釈・「国家」に支配される「個

人」の深層の真実・「個人」を動かす眼に見えない支配）から捉えなおすことによって、初期作品から各時期の代表的作品との関係、大岡の小説家としての独自性や全作品の中での位置等がより鮮明になってくると思われる。

〈付記〉

本稿は、高校国語研修講座「高校現代文授業の活性化」（長野県総合教育センター、平成九年九月二六日）で取り上げた小説教材『出征』の作品論（現代小説の教材研究論）の部分に加筆したものである。この講座ではこうした作品論を生かした現代小説の具体的な授業方法論についても述べたが、これについては別の機会に報告したい。

注記

1、詳細については、拙稿「『文学教材』“表現”の魅力と理解技術の方法の指導」『新中学校国語科経営講座 第二巻（相澤・安藤編）』（明治図書、平成九年四月）、「物語・小説の言語技術教育論」『愛知教育大学研究紀要 第四四輯』（平成六年三月、愛知教育大学）等参照。

2、『出征』等初期作品を対象にした作品論や作品に即した具体的な文体論ではないが、例えば樋口寛氏は『疎開日記』を大岡の「小説的言辞」、文体獲得の一つのテキストとして検討している（『一九六四年の大岡昇平』（平成五年

一月、新潮社)。

3、拙稿「大岡昇平『靴の話』の言語技術―メタフィクシオン構造の文体―」『愛知教育大学大学院国語研究 第五号』(平成九年三月)。

4、拙稿「大岡昇平の言語技術―歩哨の眼について―」における「知覚」の遠近法―『愛知教育大学大学院国語研究 第四号』(平成八年三月)。

5、作者大岡によれば、『出征』のエピソードの中で「品川駅涙の別れ」や「娘が水の上を匍う幻視」、子供に甘いものを送ったことも事実だが、千人針を棄てたことはフィクションであった事実が語られている。これは記録から小説の方法化という点からも確認しておくべきことの一つである(『大岡昇平・埴谷雄高 二つの同時代史』(昭和五九年七月、岩波書店)。

6、本文の引用は、全て『大岡昇平全集2 小説1』(筑摩書房、平成六年一〇月)による。

7、例えば、川本三郎氏は初期作品全般に触れて「感情に溺れることなく、あるいは無常観の畏におちこむことなく死を言葉によって明示しつつける」特色を指摘している。大岡文学全体の印象としてはその通りだが、真実を探究する論理的な思考の文体とともに、空想(幻覚)・錯誤・感傷等のモチーフが意図的に描かれているという点が、大岡の小説の方法を考える上で重要である。「解説」『ある補充

兵の戦い(徳間文庫)』(昭和五九年八月、徳間書店)。

8、「指導資料(尾末奎司執筆)」では、千人針放棄の意味は「『私』の中で抑圧された反抗の意思、「私」を殺すものへのせめてもの抗議の意思」「ささやかだが、確かな反抗の一瞬」と、国家への反抗の視点のみで解釈されている。9、「旧来の私小説の枠を破っている」と述べながら、具体的な考察はみられない。また「教材の生かし方」では「この作品の私小説としての性格に注意する」という項目が立てられており、作品観と指導観の混乱がみられる「指導資料(松本邦夫執筆)」。

(さとう・よういち、本学助教授)